

土・どろんこ

高橋

季とし

愛たね



みんな「どろんこ」になっている。

保育園の子どもたちでした。小さな土の庭に、子どもたちは無心に、土と遊んでいる。

こうして、この子たちは毎日お天気の日とともに生きていく。

私はことし七十歳、生まれたのは山深い田舎なのです。

田舎者で、田舎育ちでした。その田舎育ちの私が自由結婚をしたので、親に反対され、田舎の土を離れ、都会の生活をしなければならなくなりました。

都会といっても、横浜市内の裏長屋の六畳一間の家でした。家賃は月額七円。

都会の味が、そこから始まりました。六畳一間が私の生活の城でした。大自然の「ふるさと」を離れた時、私は「ふるさと」の心のあたたか味がたまたまなく恋しくなりました。

田舎は「ふるさと」です。

田舎の「どろんこ」道は、下駄の歯がくっついて、とれないくらい強く「土」がくいついていました。

都会の道には、その心がなかった。味気ない道でした。その味気ない道を、私は、毎日毎日歩かなければ生きて行けなかったのです。

そうして、四十年間、都会に住んでしまったのです。それでも、都会人になりきれなかったのです。なぜか、私の心には、「ふるさとの土」が忘れられなかったのです。

都会の生活は美しく、キレイかも知れないが、都会とは、「物」と「物」との交わりしかないのです。物が無ければ暮してゆけないのです。

田舎の土には心がありました。

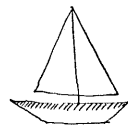
土の心を求めて、私は神奈川県厚木市七沢部落——ここは「丹沢・大田園定公園」のなかの六百坪の土地に、小さ

な「ふるさとの家」を建ててみました。それは、「ふるさと
の土」が恋しいからです。土には心のいいいがあるから
です。大自然の土を踏んでいると、草原に腰をおろしてい
ると、空をながめていると、心が大きくなってきます。
ここに自然の愛があると思っただのです。

鉢に咲く小さな花も、箱まきの野菜の葉の緑も、小さな
土のなかからです。
土はだまって、私たちの生命をたすけてくれています。
土とは、どろんことは、
ありがたいものですな。(月刊緑の新聞「土と愛」)

おもしろかった粘土遊び

長 山 篤 子



子どもと生活を共にしていますと、子どもが引きつけら
れるものに、私も自然に心が動いて参ります。特に面白そ
うな表情をしていますと、「どうしてこんなに面白いんだ
らう」と、心の中をのぞいてみたくなります。子どもはい
ろいろなものを面白がります。この「面白がる」というこ
とが、子どものあのエネルギーを燃えさせたせているのでし
ょう。そして私も、あんなに「面白がる」という気持ちに
なってみたいと思うのです。

子どもが「面白がる」場面を展開してくれる代表的なも
のにドロンコ遊びがあります。砂場でのドロンコ、雨あが

りの庭でのドロンコ、そして粘土遊びもこの中に入っ
てくると思います。

粘土遊びの場面を通してその様子を思い返してみたいと
思います。

- 園庭の机の上に粘土の大きな固まり(子どもの頭大六個
くらい)を用意しました。
- わぁーやりたい。
- いれてー、わぁーい。おおきいの、おおきいの。
- お水をかけて、べたべた、ぎゅー。のびた。
- うごいた、うごいた。